

東洋英和女学院 全学院歓迎礼拝 2008年4月11日(金)

「人生の座標軸」

大宮 溥 教学担当常務理事

聖書：ミカ書 6章6～8節

マルコによる福音書 12章 28～31節

新マーガレット・クレイグ記念講堂にて

I. 本日、東洋英和女学院に新しく赴任された教職員の方々を迎えて、全学院新年度礼拝を執り行うことができることは、意義深く、喜ばしいことでもあります。「地の塩、世の光」となるべき人間の育成のために、神が招き神が派遣される東洋英和が、教職員一体となり、理事長・院長から教職員の方々の全員が、生き生きとした教育共同体として、神の祝福を受けて出発することを、心から祈るものであります。

東洋英和女学院は、1884年カナダ・メソジスト教会の婦人宣教師マーサ・J・カートメルを校長としてキリスト教主義の女学校として設立されました。それは、日本が近代国家として出発して間もないころで、人々は欧米文化にあこがれ、当時の上流階級の子女がこの学校に入学してきました。しかしやがてその反動としての国家主義的な政治が優勢になり、1899年には文部省訓令12号によって、宗教教育や宗教行事が一切許されないことになりました。これに対して東洋英和は、高等女学校としての資格を失っても、実質的に高等女学校としての質を備えた教育を施しつつ、あくまでキリスト教教育を固守するという方針を貫いたのであります。

この東洋英和の伝統は、今日の学校教育において、非常に大切な意味をもっています。今日の教育において最大の問題は、教育による人間の知識・技術の習得に先立って、人間そのものの育成という課題が突きつけられているということでもあります。先ごろ教育基本法が改正されて、愛国心を育てるという目標が加えられました。これまでの個人の価値と人格の尊厳と共に、国家と社会を担う責任ある生き方を育てようという点が強調されています。しかし、この社会性の育成というところが、政治的な力によって強制され、政治的権力に従順な民衆の育成につながる危険性があります。真の人間の育成には、人間を社会の枠の中に閉じ込めるのではなく、人間を造り、万物の霊長として生かしている、神の前に立たせることが大切であります。そのことによって人間は、「神の像」*imago Dei*としての尊厳に目覚めると共に、神に応え、隣人と共に生きる責任ある主体として、形成されてゆくのであります。

今日は人間が育たない、危機の状態であります。それは人間の霊性が忘れられているからであります。霊性とは何かについて、佛教学者の鈴木大拙氏は、それは人間を、精神と

肉体との綜合体として、人格的に生かす力、原理であると言っています。そして、そのような人格は、他の人格との出会いと共生によって育つのであります。親が子を、見つめ、抱きしめ、語りかけ、衣食住の世話をする。その時幼児の中に、親、ひいては人間に対する基本的信頼感が芽生えてくる。自分を、愛されている主体として自覚する時、自分も他に対して愛しつつ共に生きる主体、人格として係わるものとなるのであります。しかも、この人格と人格との出会いの経験は、親と子、教師と生徒、友人同士という、人間同士の横の関係だけでなく、神と人間という縦の関係にまで広がってゆく。人間は、お互いに愛し合うだけでなく、人間を超えた神の愛を受け、この神の愛に応じて自分の使命を果たしてゆく。これが人間の霊性であります。

このような人間の霊性への目覚めと自覚を与えるものが宗教であります。このような霊性の教育は、政教分離を建前とする公教育の枠の中では十分に果すことができません。これを果すのが、私立学校、特にミッションスクールの使命であります。

東洋英和女学院は、日本におけるミッションスクールの一つとして、この使命を果そうとしていますが、それは、この学校の中にいるクリスチャンだけの使命ではありません。東洋英和女学院の全教職員がその担い手であります。明治期に世界伝道が始められた時、各教派の宣教局、ミッションボードは、各国にキリスト教会を建設することと共に、ミッションスクールを建て、キリスト教精神をもって社会を築く人間の養成を考えました。教会を立てるだけでなく、社会をキリスト教精神で生かし、築くことを目的としたのであります。従って、ミッションスクールの担い手である教職員の方々は、聖書に親しみ、その心に触れ、その心をもって、教育の使命を果たして頂きたい。そして、ここに育つ学生・生徒も、聖書の心を心とする霊性豊かな人間として社会に出て行ってほしいのであります。

Ⅱ 今日、私は、聖書の心とも言うべき御言葉を二つ選びました。一つは旧約の預言者ミカの言葉であります。この6章6節～8節の言葉を、あるドイツの旧約学者は、「預言者のカテキズム」と呼んでいます。カテキズムとは「信仰問答書」と訳されますが、キリスト教の基本を、問答形式で教えるものであります。ここには、旧約の預言者たちの教えが要約された形で述べられています。

人々は預言者ミカの教えに、心の目を覚まして、神を忘れた無軌道な生活を悔い改めて、新しい生活を築こうとします。そして、自分たちが神に立ち帰って、正しい生活をするために、一体何をしたらよいのかと訊ねるのです。盛大な宗教行事を挙行し、おびただしい供物を神に捧げたらよいのだろうか？この問いに対してミカは形式的な儀式ではなく、生活の変革を要求したのです。「正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(8節)

このミカの言葉は、代々の預言者が教えたことの要約であります。「へりくだって神と共に歩む」というのは、神は世界を創造し、愛と真実をもって歴史を導いておられるのであ

るから、神の導きに従って、神の民として歩いてゆくことであります。その際人間は孤立した歩みを辿るのではなく、仲間と一緒に歩む。共同体を築いてゆく。そのために「正義を行い、慈しみを愛する」。正義と愛の共同体を作ってゆくことが教えられているのであります。

新約聖書においては、イエス・キリストが、聖書全体の要約として、神を愛し、隣人を愛する、愛の道を示しておられます。私の恩師である隅谷三喜男先生は、晩年「人生の座標軸」ということをよく話されました。座標軸は、縦軸と横軸から成り立っています。人生にも縦軸と横軸があり、縦軸は神と自分との関係であり、横軸は隣人と自分との関係であります。そして神と自分との縦の関係が、神に愛され神を愛する、その愛の深さ、浅さによって、その人の人生の価値は<sup>プラス</sup> + の高い位置におかれていることとなります。

また、隣人と自分との横の関係が正義と愛の正しい状態にある時、その人生の価値は高いのであります。佐渡卓という、かつて経済界で重きをなし、晩年鳥居坂教会で洗礼を受けた人が、人生の価値は、自分の生きてきた時間を分母にし、その中で自分が愛に生きた時間を分子としてあらわし、その数値が 1 に近づけば近づくほど価値が高いと語っています。

主イエス・キリストは、この人生の座標軸をお示しになり、しっかりした土台の上に人生を築いてゆく様に教えられました。しかも、教師としてこれを教えられただけでなく、この人生の座標軸の立て直しをして下さったのであります。キリストの目に映った世界は、人間が神に背を向け、神と人間の関係が断絶していました。そこでキリストは人間の罪の責任を自分の身に引き受けて、十字架の死を遂げ、御自分と父なる神との深い愛の関係の中にわれわれを入れて下さったのであります。十字架は縦軸と横軸が交わった形をしていますが、それはキリストの犠牲を通して、神と人間との関係が回復し、人間と人間との関係も、愛の関係として築き直されたことをシンボリックに示しているのであります。

東洋英和女学院は、敬神奉仕をモットーとし、マルコによる福音書 12 節 28～31 節のキリストの教えを、建学の土台としています。これは、この学院の教育が、神を愛し、人を愛する人生の座標軸を確立するものとなるようにとの志から出ているものであります。

私はこの 2 月に日本聖書協会の理事長として、米国の **National Prayer Breakfast** (大統領と国会議員を中心とする、国際的な祈りの集い) に招待されて、出席しました。祈りによって神と交わり、神のもとで共に生きようとする、人生の座標軸を、社会の座標軸、世界の座標軸として確認する機会でありました。そこで、私は昨年の **National Prayer Breakfast** のメインスピーカーであった **Francis S. Collins** のメッセージを手に入れました。この人は人体のすべてのゲノム (細胞染色体の基本的な構成) の遺伝子構造を分析し、データ化した最初の科学者であります。しかし科学者であると同時に人生の意味を真剣に問い、神との出会いに導かれた人でもあります。彼は 2006 年に『神の言葉』“**The Language of God**” と題した書物を記し、自分の心の旅を報告しています。彼は宗教的な環境に育ったのではありませんでした。医学者として病人に触れ、肉体的には限界状況にある人が、

霊的に冷静にかつ力強く生きている姿に接したり、また、生命倫理の問題と取り組んでいる時に、ただ生物体を技術的にどう処理するかという次元でなく、「生命への畏敬」の感覚、そして人間の心を動かしている「道徳的法則」 **moral law** があることに気付いたのであります。科学研究を通して聞えてくる自然の語りかける言葉と共に、人の心に霊的に語りかけてくる神の言葉があることを知ったのであります。

私は、この書を読みながらドイツの哲学者のイマヌエル・カントの言葉を思い起しました。「私が思い廻らす時、深く感銘を受けるものが二つある。それは、星ちりばめた美しい夜の空の光景と、わが心のうちに語りかける道徳律である」。

このカントの言葉は、科学技術の解明する自然の世界と、敬神愛人、敬神奉仕の霊性の世界とを、美しく言い表わしたものであります。

東洋英和の教育は、心身の調和の取れた人格を育て、深い知性と豊かな霊性を備えた人間を生み出し、社会に送り出すことであります。教職員の皆さんが、聖書の心を心として、共通の使命を担う使命共同体を築いて下さり、人生の座標軸、人生の羅針盤をしっかりと備えた若者たちを育てて下さる様に、心からお願いし、またそのために、神の力強い支えと導きがあります様に祈るものであります。